

次の文章を読んで設問に答えよ。

小説の起源をいつ、どこに求めるかは難題である。ただ、人類史的な視点から言えば、ストーリーを語ろうとするコミュニケーションの意欲が人類に備わっていることが、あらゆる小説の必要条件であることは確かに思える。もし人間が「語る動物」でなければ、小説が生まれることもなかっただろう。

イ。どんな共同体にも物語はあるが、それが小説という形態をとるようになったのは、比較的新しい現象である。小説とは語りのコミュニケーションの大海に浮かぶ島嶼のようなものであり、ゆえに世界文学の進化を考えるには、まずは語り（ナラティブ）の性質を考えるべきである。この点については、文学研究の外部に手がかりを①のよう

だろう。例えば、進化心理学者のロビン・ダンバーは、人間の言語的なコミュニケーションを猿の毛づくろいと類似している。霊長類の社会は多くの時間を毛づくろいに費やして、集団的な結束や帰属感を②できた。しかし、群れが大きくなれば、毛づくろいに費やせる時間は限られ、社会の結合を保てなくなる。ダンバーによれば、この限界を突破するためにこそ、言語が必要とされた。対面の毛づくろいにかなる膨大な時間を省略しながら、それでも巨大な群れを維持するために、いわば音声的な毛づくろいとしての言語的コミュニケーション、とりわけゴシップ的な話題が求められた。ダンバーは大胆にも、人間に噂話をさせるために言語が進化したと結論づける。

ア。ダンバーが言うように、人間の会話は知的・専門的な内容を含んでいたとしても、すぐに卑近な人間関係の話題に転じてしまう。われわれは既知の人間も見知らぬ人間も遠慮なくゴシップの話題にのせながら、集団の結合を確保し、集団内の自らの位置をもたえず③でている。このような社会生活のあり方はインターネット時代になっても変わらないし、むしろ④甲 している。ネットのユーザーはくだらない週刊誌的なゴシップばかり追い求めているが、人間の言語がそもそも噂話の交換のために進化したのだとしたら、それも驚くほどのことではない。

（情報環境デザイン工学部）
（建築学）
（健康学）
（経営学）
（経理学）
（社会学）
（心理学）
（国語）
（外国語）
（B日程）

□。例えば、あの果実は食べられるのか、彼とは友人になれそうか、あの部族は敵対的か、明日の天候はどうなるか、狩猟にどれだけの労力が必要か——人類の先祖はそのような詳細を下し、それを仲間と共有して生存してきた。今日の大衆社会のゴシップは、そのような環境の評価を見ず知らずの他人にまで拡大したものである。

ハ。それでも、ダンバーの考えでは、われわれの噂話は恐らくその根底においては共同生活に資するもの、つまり協力的・利他的なコミュニケーションを④⑤ものである。ひとが噂話に熱中するのは、本来はそれによって何らかの利益を他者と分かちあおうとするからである。

霊長類学者のマイケル・トマセロもまた、言語を協力のための道具として捉えている。彼によれば、人間の幼児のやる指しは、情報の i の意欲を示している。幼児は大人たちが指しに何とか反応しようとすることを知っており、だからこそしきりに対象を指示し、大人とその情報を共有しようとする。言葉を話す前から、手ぶりや身ぶりでも外界を指示し、いわば大人を教育しようとする幼児のコミュニケーションは、他の霊長類と比較しても際立った特長を⑤でている。トマセロはこの前言語的なふるまいが、言語の進化の基礎であると考えた。

乙。他者と「協力」するという「生活形式」(ワイトゲンシュタイン)が先立っていたからこそ、言語は今のようになり進化したのである。

二。トマセロの考えでは、そのとき、言語の形式はわれわれの想像を絶したものになる。

さらに注意を引くのは、もしも協力でなく競争というコンテクストで進化していたなら、人間の「言語」はどんな風になっていただろうか——それを「言語」と呼びたいなら、の話だが——と想像してみることである。この場合、共同注意も共通基盤もないことになるから、指示するための行為も人間のようなやり方では行えなくなる。とくに視点や、その場に存在しない指示対象に関してはまず無理である。お互いに協力的であるという想定の下での伝達意図は存在しないし、それゆえどうしてある人が自分とコミュニケーションをしようとしているのかを「生懸命に見つけようとする理由もない——またコミュニケーションの規範もない。慣習とは人々が協力的に基づく理解と関心を共有している場合にしか生じないものだから、慣習もないこ

2026年度 大阪産業大学
入学試験問題 一般前期入学試験

とになる。

ホ

。トマセロによれば、それはフィクションも生み出せないし、協働の道具にもならない。そこからは慣習も発生せず、他者の意図を読み取らうとする動機も生じない。この競争的な言語でもコミュニケーションは可能かもしれないが、それは協力的な言語によるコミュニケーションに比べれば、ひどく貧弱なものとなるに違いない。

このように、言語は必ずしもために進化したわけではなく、協力的なコミュニケーションというコンテクストに沿って、あらかじめ進化的ⁱⁱを敷かれていた。カントが「非社会的社交性」という^aタグバツな概念で説明したように、人類は好むと好まざるにかかわらず、協力的な社会生活を営むように仕向けられている。人間が「社会を求めかつ社会から逃れようとする、その矛盾した傾向」に囚われていることを、カントは見抜いていた。われわれが自発的に思いやりをもとうとするそのはるか手前の、われわれが意識できない次元で決まっている「生活形式」が、利他性や社交性の源泉となる。ダンバーやトマセロに従えば、言語はこの生活形式の産物である。

【C】、このような「生活形式」はあくまで人類の言語的コミュニケーションの出发点であり、進化的終着点ではない。小説という語りの技術は、この地点からどのような進化を【6】、ついに世界文学というグローバルな流通の場を獲得するまでに到ったのか。近年、ダーウィンの進化論を応用した文学論を構想しているブライアン・ポイドは、語りの特性を次のように説明した。

語りは、ほかのいかなる場所ないし時間にも言及しうるものであるために、「今・ここ」から高度に独立した状態を保っている。【7】わたしたちは率直な情報を見返りとして求める場合には率直な情報を開示する十分な理由があるけれども、情報を戦略的に開示し、^a隠蔽し、ゆがめ、あるいは一見真実に見える【iii】を作り出すことをする。語りはいつも、少なくとも戦略の痕跡を帯びている。わたしたちは誰の関心を、いつ、どのように引くべきかを判断しなければならぬし、受容者の

関心を【乙】し、受容者の努力や抵抗を【丙】しようとする。

へ

。われわれの日常会話でも、あれこれ語りあううちに、その話題となる時空はランダムに変化してゆく。「今・ここ」に拘束された身体的な行為（食べること、眠ること、歩くこと……）とは異なり、語りは「今・ここ」の時空からの分離、つまり時空のワープによって特徴づけられる。

興味深いことに、語りの「今・ここ」からの高度な独立性は、紀元前五世紀にギリシアのヘロドトスが著した『歴史』ⁱで、早くも戦略的に活用されていた。例えば、エジプトの祭りの起源に関わる荒唐無稽なエピソードを紹介した後、ヘロドトスは「このようなエジプト人の話は、そのようなことが信じられる人はそのまま受け入れればよからう。本書を通じて私のとっている建前は、それぞれ人の語るところを私の聞いたままに記しることにある」という印象深い言葉を書記している。ヘロドトスにとって、歴史は出来事を伝える語りを再話すること、つまり語りの語りという性格を有しており、それが信用に値するかという問題は宙づりにされている。ゆえに、たとえ【w】的な伝承であったとしても、ヘロドトスはその客観性の乏しさを知らながら記録に残した。

D

、ヘロドトスはたんに受動的に「聞く」だけの著述家ではない。『歴史』を読めば、彼が自分の足で精力的に各地を訪れて、噂の真相を探ろうとする一方、その収集が及ばない範囲については伝聞情報をうまく用いていたことが分かる。ヘロドトスは当時屈指のフィールドワーカーであり、かつ遠方の他者の「語り」の【v】でもあった。ヘロドトスの次世代にあたる歴史家トゥキディデース——ペロポネソス戦争に従軍し、アテナイを襲った悲惨な悪役についても精細な記録を残した——は、サイヤクの因果関係を究明し、それを後世の教訓しようとした。【E】、ヘロドトスはこの因果関係を厳密に見定めるよりは、真偽の判定を脇に置いて、過去に関する語りの集積回路を築いたのである。

このような方針は、ヘロドトスの記述にどこか気まぐれな性格を与えている。そもそも『歴史』の本来のテーマは、東方のペルシア人に抗したギリシアの戦争のジオジュツにあったが、語りはこの本筋からたびたび脱線する。そこには、アジアを征服したス

キュタイ人の習慣に関する文化人類学的な記述、エジプトの祭祀をめぐるゴシップ的なエピソード、アゾフ海（現在のウクライナとロシアに接する黒海の内海）の地理の紹介というように、驚くほど広範囲にわたる情報が書き込まれていた。

どんな場所や時代も自由に「J」で語る語りは、もともと「今・ここ」から高度に独立しているため、いつでも無軌道なものに変じる可能性がある。ヘロドトスはこの語りのアナキーな性格を巧みに利用して、記述の範囲をユーラシア規模にまで大胆に広げた。このような語りによる「X」は、古代の文芸にとどまらず、はるか後の二〇世紀の実験的なモダン文学からM1タワイクション、SFに到るまで、広く認められる。特に、「闇の奥」や「ロード・ジム」のようなジョゼフ・コンラッドの海洋文学は、ヨーロッパ人の通念を超えた闇の中心、つまり世界認識の限界まで、語りの力で到達しようとした。異常な体験をした語り手を語るというコンラッドの手法は、語りのジジョウ^dによって世界の果てを垣間見せるものである。語りが人間の心を安定した^oり手から引き抜き、認識の暗がり^aに連行する力をもつことを、彼は深く理解していた。

福嶋亮大著「世界文学のアーキテクチャ」(PLANTS)から

問一

空欄 イ〜へ

には、次のどの文を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ。

- 1 語りはさまざまな時間や空間にアクセスし、そこで起こった／起こり得る／起こったかもしれない出来事について評価を下す
 - 2 逆に、言語がもつばら「競争的」に、つまり他者を攻撃し追い落とすために用いられるとしたらどうかと想像してみるのが面白い
 - 3 この空想上の「競争的」な言語は、今の言語とは似つかないものになるだろう
 - 4 ゴシップはもつばら人間の評価に関わるが、より広く言えば、人類はたえず環境の評価（アセスメント）をやるように仕向けられている
 - 5 その一方、語る動物であるからといって必ず小説を生み出すわけでもない
 - 6 むろん、やっかみや嫉妬によって加速する大衆社会のゴシップは、たいてい下劣であさましい
- 問二 空欄 A〜E には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ。
- A 1 実際 2 だから 3 また 4 やはり
 - B 1 さらに 2 それなのに 3 つまり 4 とはいえ
 - C 1 したがって 2 それならば 3 それゆえに 4 だとしても
 - D 1 案外 2 むろん 3 要は 4 よって
 - E 1 そのため 2 それに対して 3 例えは 4 にもかかわらず

問三 空欄 i s v i (i は二か所) には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ (同じ言葉を二度用いてはならない)。

- 1 オカルト 2 コレクター 3 シェア 4 ストーリー 5 テリトリ 6 レール

問四 空欄 ①⑤⑥ には、次のどの動詞の活用形を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ (同じ動詞を二度用いてはならない)。

- 1 促す 2 示す 3 高める 4 確かめる 5 遂げる 6 求める

問五

傍線 a y d のカタカナと同一の漢字を使うものを、それぞれの中から一つ選んでマークせよ。

- a タクバツ——1 資金潤タク 2 切磋タク磨 3 タク越性 4 タク児所 5 身支タク
b サイヤク——1 御利ヤク 2 特効ヤク 3 面目ヤク如 4 ヤク定書 5 ヤク払い
c ジョジュツ——1 ジョ行 2 ジョ産婦 3 ジョ事詩 4 ジョ破急 5 ジョ名
d ジョウウ——1 ジョウ就 2 ジョウ長性 3 ジョウ動 4 ジョウ歩 5 ジョウ務員

問六

傍線 ありお の漢字の読み方をひらがなで書け (送りがなを記してはならない)。

問七

傍線 I ~ IV の本文中の意味に最も近いものを、それぞれの中から一つ選んでマークせよ。

- I ランダムに——1 意図的に 2 加速的に 3 繰り返して 4 慎重に 5 無作為に
II 荒唐無稽な——1 根拠のない 2 前例のない 3 難解な 4 まじまじのない 5 野蛮な
III 宙づりにされている——1 解決されている 2 隠されている 3 破棄されている
4 保留されている 5 忘れられている
IV メタフィクション——1 虚構の物語をあたかも現実であるように表現する作品
2 現実世界の出来事ありのまま伝える作品
3 登場人物の詳細な心理描写を重視する作品
4 未知の科学技術や未来の世界を空想して描く作品
5 物語が作られたものであることを意識させる作品

問八

空欄 甲・乙・丙・丁 には、次のどの言葉を入れるのが最も適当か、それぞれ一つ選んでマークせよ (同じ言葉を二度用いてはならない)。

- 1 二体化 2 顕在化 3 最小化 4 最大化 5 対象化 6 単純化

問九

空欄 X には、どのような言葉を入れるのが最も適当か、本文より六字以内で抜き出せ。